県立博物館

平成６年度第２回企画展

『げんき・病・元気』

―― 健康をめぐるヒトとモノ ――

会　期　７月23日(土)～９月18日(日)
休館日　月曜日・祝日の翌日（９月16日）

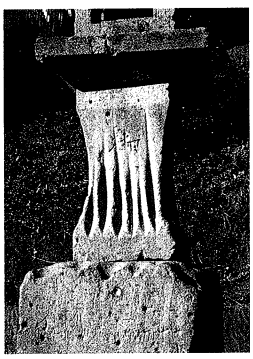
長い間、人々は元気であることを切望し、病との決別を図って、薬や治療法などの研究・開発に努めてきました。しかし、現状を見ると、結果的に、それを果たせずに現代に至っているといえるでしょう。

日本での医療の歴史を語るとき、主に諸外国からの影響に主眼が置かれてきました。具体的には、まず、中国大陸からの影響であり、続いてヨーロッパからの影響などです。こうした過程で、「古いものは新しいものに駆逐されていく運命にあった」と思われがちです。確かに、なくなってしまったものもありますが、一方で、人々の間に根ざした医療に関わるモノおよび行為のなかには、絶えることなく、連綿と現代に至るまで生き延びてきたものもあります。たとえば、現代においても、マジナイを信じる人は多数存在していますし、普段信じていない人でも、病にかかるとマジナイをうける人もいます。また、漢方薬・医学は現代社会に広く根付いています。

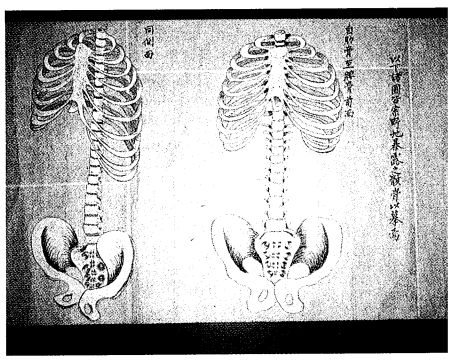
本企画展は、病を知るためのモノや、病を治すためのモノをとおして、元気であった人間が病にかかり、それを克服して、また元気を回復するといった、人間と病の関係の歴史を紹介します。展示資料は、県内各地に残る医療道具・薬・マジナイ等の資料を中心とします。それ以外に、近世以来福島県と関わりの深い富山県の売薬資料、新潟県の毒消し売り資料や、『解体新書』等の日本医学史上の基本資料も展示します。

「御めあらい薬　正明丹」版木

救命丸等絵紙
富山の売薬の土産の一種



大雷神社の石燈籠（玉川村）
万病の薬として、近隣の人々が燈籠の側面を削って飲んだ。削られた6筋の溝が残っている。



山脇東門「玉碎臓図（ぎょくさいぞうず）」
解剖図